

観光ボランティアガイドの台頭とその意義

— 『篤姫』 ブームを事例として —

深見 聡*

This article aims to close in the actual activities of the tourism volunteer guides in order to clarify what kind of empowerment their existence can achieve when building the sustainable tourism, paying attention to the tourism volunteer guides that began triggered by the “Princess Atsuhime”, the long running TV drama broadcasted in 2008. Specifically, we conducted hearing investigations to understand dynamically the tackling of two groups of “Tourism Station of Kagoshima-Strolling-the-Street” and “Kanmachi of the Restoration Community Development Project”.

As a result, it should be specially noted as the characteristics of the respective group that the former group came up with a broad tackling in all citizens and the entire urban district, and the latter made good effects to the tourism plus some extra activities in relatively small area such as the unit of multiple neighbourhood associations.

However, an issue has been found out existed that there might have been more sufficient consideration required in the point that the surge of the feeling for the tourism volunteer guides had been triggered by the long running TV drama. The long running TV drama is of the form suited for mass tourism-like needs, and the strolling the street is of the form suited for small tourism-like needs. Therefore, as an entity to coordinate different needs, a mechanism that allows the tourism volunteer guides to participates in an early stage of selecting the routes etc. needs to be built. This time, while they, as talents who supported the “Princess Atsuhime” boom, had a high potential, we were unable to confirm the existence of an opportunity that allowed them an involvement to such an extent.

Concerning whether the aspects of small tourism and sustainability that are their characteristics can be expanded in the future, it is necessary to continue to watch carefully the process how they can build cooperation with people who have been performing conventional similar activities.

I. はじめに

持続可能な観光を考える際に、リピーターの獲得という視点は欠かせない。彼らは、本物にふれようと実際に現地を訪れ、その地に魅力を感じれば、また訪れてみたいという意識を創出させる貴重な存在とな

キーワード：観光ボランティアガイド, 大河ドラマ『篤姫』, スモール・ツーリズム, 地域住民, コーディネート

* 本研究所客員研究員, 長崎大学環境科学部准教授

る。とくに、人口減少社会に入った日本は、観光立国を標榜して国内外を問わず交流人口の増加に活路を見出す方針を打ち出した。2008年の観光庁の設置や、地方自治体における観光部局の拡充の動きがそれを物語っている。「本物」とは抽象的ではあるが、歴史・自然・景観・施設・食など可視的なものから、雰囲気・人情といった感覚的なものまでが広範にふくまれる。いずれも共通するのは、「そこに行かなければ味わえない」という非移転性や有機的連鎖性といった特徴を有する点である（江村ほか，2009）。

しかし、見方を変えれば、そのことは何らかの理由で偶然に足を運んでもらうケースが発生すれば観光客の増加が見込めるといふ、どちらかという受け身的な観光施策になりがちな側面をもっている。写真だけではイメージしにくい地域の観光資源に対して、どのようにして関心を向けてもらえ、かつ行動に移してもらえるかが、持続可能性を高める上でも大きな課題といえる。

そのなかであって、近年、彼らを迎える立場になる地域住民のなかには、みずからがまちのよさを発信する観光ボランティアガイドとなり、「まち歩き」企画を担う事例が急速に広がりを見せている。「本物」に直にふれてきた人材が前面で活躍することで、観光客の新たな掘り起こしにもつながり、観光を担う新しい可能性をもった存在としての期待も大きい。

このような循環を作り出すきっかけの一つに、テレビドラマや映画の放映がある。フィルム・コミッションを組織する自治体や観光協会等が相当数に上っていることから、観光による地域活性化への期待の大きさがうかがえる。その舞台となるロケ地をめぐるたり、登場人物にゆかりのある場所を訪ねたりしたいという需要は、たとえばフジテレビ系列で放送されたドラマ『Dr. コトー診療所』（2003から2006年にかけて制作）はよく知られたケースであろう。これは、舞台である架空の島・志木名島として沖縄県八重山郡与那国町がロケ地となり、これまでのダイビングや海底遺跡を目的とした需要に加えて新たな観光客が訪れることとなった¹。

日本において、長年にわたって影響を与えてきたものに、NHKの朝の連続ドラマと大河ドラマが挙げられる。とりわけ、大河ドラマは歴史観光の需要を高める効果は絶大なものがある。1963年に放送が開始されて以来、その舞台となった地域は、放送期間とその前後はとくに観光客の増加が見込まれ、行政や民間といった立場を超えた誘致運動が繰り返され、観光ボランティアガイドの誕生がマスコミで報じられることも多くなってきている。

しかし、これまで観光ボランティアガイドの先行研究をみてみると、1990年代半ばから散見されるが、活動事例を紹介したレベルにとどまっているものがほとんどである。そのなかで、地域住民を主体的な担い手として論じたものに住木（2007）や矢島（2008）があるものの、いずれもすでにガイドが活躍して数年が経過し、その存在が定着しつつある対象をおもに扱っている。当然ながらその研究の果たすべきところは大きいものの、観光ボランティアガイドの本質に迫る視点、すなわちいままさにガイドが誕生し、地域住民が活動を伸ばしていこうとしている動的な事例を追跡するという研究はほとんどない。類似の問題意識にたったものとしては、高校生が担い手としてかかわったものを扱った論文はあるものの（森川，2008）、年齢や属性にとらわれない地域住民そのものをおもな対象とはしていない。さらに、本稿で述べてきたように、大河ドラマとのかかわりの視点から研究の対象とし²、観光ボランティアガイドのもつ可能性や課題について論じたものは皆無である。したがって、観光ボランティアガイドが全国各地で誕生している今日、地域住民が主体となっているこれらの活動の実態を分析することによって、彼らの存在が、これからの持続可能な観光を構築する際にどのようなエンパワーメントを発揮しうるのかを明らかにする必要がある。

1 端的にそのことがうかがえる例として、与那国町役場のホームページがある。このトップ中央に、「Dr. コトー診療所ロケ地マップ」のリンクが置かれている（<http://www.town.yonaguni.okinawa.jp/> 最終閲覧日：2009年6月10日）。

2 聞き取り調査は、2009年6月6日、19日におこなった。

そこで本稿では、2008年に放送された大河ドラマ『篤姫』に焦点をあてる³。この放送を契機に観光ボランティアによるガイドを始めた、(財)鹿児島観光コンベンション協会の「鹿児島まち歩き観光ステーション」(以下、「ステーション」という。)と、「上町(かんまち)維新まちづくりプロジェクト」(以下、「上町維新」という)の2つの団体の取り組みに注目してみたい。いずれも、篤姫ゆかりの地である鹿児島市市街地をガイドのおもな対象としており、多くの住民が参画しやすい条件下にある地域団体という共通点がある。この事例を比較考察することで、同じ観光ボランティアガイドという言葉でまとめられる活動にも、さまざまな主体や背景があり、地域コミュニティに与える影響にも特質のあることが実証的に把握できると考えられる。とくに、『篤姫』は歴史観光の分野からみた波及効果についても、ブームと称されるほどの高い注目度の割には、研究の対象とされてきていない。本稿は、その第一歩に踏み込もうというものである。

II. 『篤姫』ブームと観光への波及効果

1. 大河ドラマ『篤姫』とは

主人公に、天璋院篤姫(1835~1883)をおき、幕末から明治維新における動乱期を生き抜いた人びとの姿を描いた。篤姫は、13代将軍・徳川家定の御台所として江戸城に入り、大奥をまとめて江戸城の無血開城と徳川家の存続に尽力した人物である。また、ドラマ化するにあたって、原作には登場していないものの、篤姫と同年生まれの小松帯刀(1835~1870)を準主役として取り上げた。帯刀は、薩摩藩城代家老として西郷隆盛や大久保利通ら薩摩藩士をまとめ、薩長同盟の成立や15代将軍・徳川慶喜へ大政奉還の進言をするなど歴史の表舞台で奔走した。しかし、明治新政府での活躍を期待されながら早世した人物である。ドラマによってその事跡や人柄が描かれたことで、「幻の名宰相」として全国的な知名度を高める契機になった(原口, 2008)。

『篤姫』は、2006年8月に制作決定が発表され、翌年から篤姫の生まれた鹿児島県内各地でロケがおこなわれた。原作は宮尾登美子氏の『天璋院篤姫』(1984年、講談社刊)である。しかし、地元出身の御台所が主人公である小説は、出版当初の鹿児島での反響は取り立てて大きくはなかった。また、ドラマで準主役に置かれた小松帯刀の知名度も地元でさえ決して高いとはいえず、制作発表当初はどちらかというと地味な配役を不安視する声もあった。

しかし、過去の大河ドラマの年間視聴率を比較して、「幕末ものは当たらない」というジンクスを破っただけでなく、大河ドラマ史上初となる本放送期間中のアンコール再放送の実施など、いわゆる「篤姫ブーム」が巻き起こった。全50回で視聴率が20%を超え(年間平均24.5%)(図1)、幕末を題材としたもの、また過去10年の大河ドラマと比較してもそれぞれ最高を記録した。

2. 観光客の動向

また、放送を機に、篤姫ゆかりの地をめぐる「まち歩き」企画が登場し、鹿児島でロケに使われた島津家別邸の仙巖園や石橋記念公園(写真1)、篤姫の生誕地・今和泉島津家本邸跡などを訪れる観光客の増加がみられるようになった。また、『篤姫』で使用されたセットや衣装、現地ロケのようすなどを展示・紹介する特設展示館は、生誕地のある鹿児島市と、ゆかりの地である指宿市にそれぞれ置かれた。「いぶすき篤姫館」は、2008年1月から1年間の開館期間中、目標の8万人を上回る約17.6万人の入館を記録した。また、「篤姫館」は、目標の20万人に対して同じく開館1年の期間で約57万人が入館し、好評に応え

3 観光動向の変化については、すでに深見(2009)において論じているので本稿では主題として取り上げない。

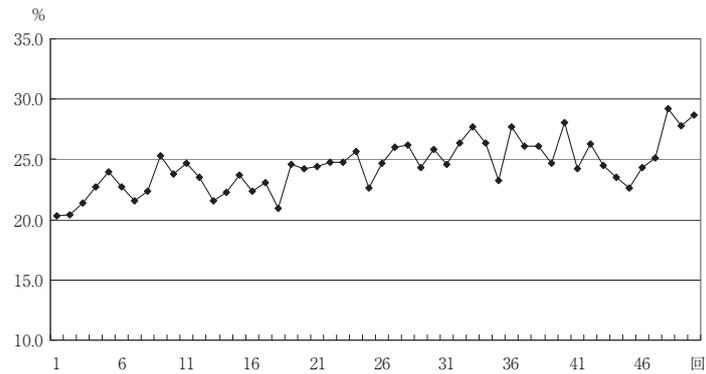


図1 『篤姫』の視聴率推移

インターネットサイト「ドラマナビ」http://www.doranavi.info/02/nhk_2.htmlに公表されている数値をもとに筆者が作成。サイト最終閲覧日2009年1月15日。



写真1 石橋記念公園に架かる西田橋

江戸時代後期に鹿児島城下を流れる甲突川に架けられた石橋が移されて2000年に開園。西田橋は参勤交代路にあたり、篤姫もここを通り江戸に向かったとされる。

で閉館を2009年3月末まで延長した(図2)。とくに『篤姫』の放送第12回までは、篤姫が江戸に出立する前の薩摩での生活が舞台の中心に描かれており、陸繋島の知林ヶ島や新永吉地区の棚田といった指宿市内の各所でもロケがおこなわれた。それを反映してか、「いぶすき篤姫館」の入館者数は5月にピークに達している。その後、ドラマの視聴率が20%台後半を記録することが多くなったのと、1月の開館当初の入館者数を一度も下回る月がでることなく堅調な推移をたどったのがおよそ対応しているのが読みとれる。

Ⅲ. 観光ボランティアガイドの事例

1. 鹿児島まち歩き観光ステーションの取り組み

『篤姫』の放送が決定した2006年は、「長崎さるく博'06」のまさに開催期間中でもあった。その成功が次第に全国的に知られるようになってきたときである。鹿児島市でも2008年1月のドラマ放送開始に照準

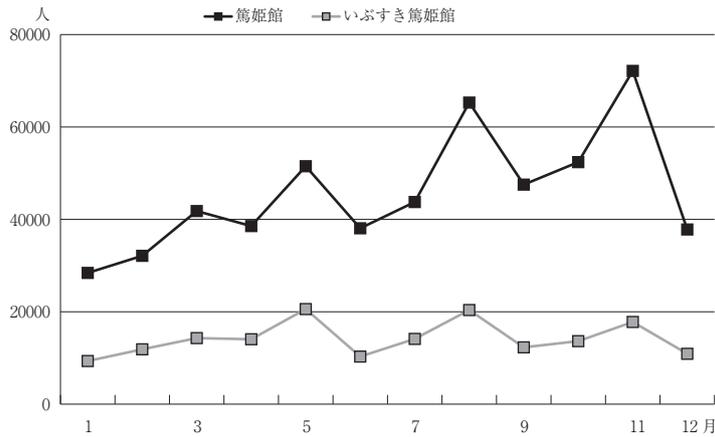


図2 「篤姫館」「いぶすき篤姫館」入館者数の推移

『鹿児島県観光動向調査』(2008年1~12月)をもとに筆者が作成。

を合わせ、2007年10月に鹿児島市やNPO法人などが協働して、まち歩きルートの選定と観光ボランティアガイドの養成講座がおこなわれた。そして、2008年4月より、「鹿児島ぶらりまち歩き」と題して、全12コースが定期的に提供されるようになった(図3, 写真2)。『篤姫』に深く関係するものとして、「薩摩が生んだファーストレディ」篤姫ゆかりの地を歩く「幻の宰相“小松帯刀”と島津77万石の城址を偲ぶ」「近代日本はここから生まれた! 島津斉彬の近代化遺産を歩く」も含まれている。

2008年度末現在、ガイド登録者は104名いるが、居住地は市内外の各地に分散している。とくに核となって活動しているのは10名ほどである。内匠洋子氏(50歳代・女性)はその一人として活躍しており、「いろいろな目的をもって参加する方たちに案内することを、自分が楽しめる」ように努めたという。時には話が弾むと定刻を超えそうになったこともあった。篤姫や斉彬についての質問に応えられるようにと、自らの研鑽の必要性を感じ「かごしま検定」⁴のグランドマスターに合格するなど、「自らのまちの発見につながることも多かった」という。



図3 「鹿児島ぶらりまち歩き」の案内パンフレット

4 正式名称は「鹿児島観光・文化検定」。鹿児島商工会議所主催で2006年から始まった、いわゆるご当地検定の一つである。マスター(標準)・シニアマスター(上位)・グランドマスター(最上位)に分かれている。



写真2 「鹿児島まち歩き観光ステーション」のようす

参加者数に目を転じると、2008年度は全コース合わせて2,417人を数えた。そのうち、「薩摩が生んだファーストレディ」篤姫ゆかりの地を歩く」に全体の5割弱が集中している（表）。これは、『篤姫』により彼女への注目が集まったことを裏づける。しかし、この2千人台という結果が妥当な水準であったのかは、課題としてとらえるべきであろう。とりわけ、ドラマの制作決定からガイド養成開始まで1年余り、ドラマ放送開始からまち歩き開始まで3か月の空白期間が生じたのは、本事業が全市街地的なイベントとして、地域住民や観光客への浸透を図る際に、すでにスタートの時点から不利的条件が存在していたと言わざるを得ない。

今後について、ステーション所長の濱田康雄氏は、①往時の歴史を「見せる」話術を持つといったガイドのプロ化、②話題性のあるタイトルや内容を随時取り入れていく⁵、③とくに篤姫の関連の深いルートについては、ドラマでの内容を話題にしながら観光客との対話を重視する、という3点に力をおきたいとしている。

2. 上町維新まちづくりプロジェクトの取り組み

上町地区は、島津家が現在の鹿児島市域に居城を構えた14世紀半ば以来、城下町として発展し、藩政時代には上級武士たちの居住区であった。そのため、島津家の歴代当主らが眠る福昌寺跡や、今和泉島津家本邸跡、篤姫の婚儀に際し婚礼品の調達にあたった西郷隆盛の眠る南洲墓地など、篤姫ゆかりの見どころも多い。「上町維新」は、このような地域資源を活かすべく、2008年7月、「いつまでもこの上町で暮らし続けたい」と思えるようなまちづくりを掲げて⁶、池之上町内会など上町地区の複数の町内会や通り会などに加入する地域住民で結成された。2009年6月現在、15名で活動する任意団体である。

設立の経緯は、2007年11月、春山亮氏と中村剛康氏（ともに30歳代・男性）、山下春美氏（40歳代・女性）の出会いにさかのぼる。ちなみに、春山氏は設備工事会社勤務、中村氏は専門学校講師から転身し「かごりん」を起業、山下氏は主婦と、それぞれの立場から地域での活動に興味をもってきた方々である。団体設立へ大きく前進した直接的なきっかけは、上町地区にある池之上町内会が2008年度の鹿児島市市民参画推進課（2009年度より市民協働課へ改称）の助成「市民とつくる協働のまち事業」に応募し、「上町維新まちづくり事業」が採択されたことに求められる。

5 たとえば、島津斉彬の集成館事業に関するものが、2009年1月に「九州・山口の近代化産業遺産群」を構成する遺構として世界遺産暫定リスト入りしたこと、足湯体験や薩摩自願流の演武見学を新たにコース内に採り入れたことが挙げられる。

6 「上町維新まちづくりプロジェクト」ホームページ <http://kanmachii.chesuto.jp/c5868.html>（最終閲覧日：2009年6月10日）より。

表 「鹿児島ぶらりまち歩き」参加者数（2008年度）

	総数（人）	割合（％）
西南戦争激戦跡！ 西郷隆盛終焉の地を歩く	260	10.8
薩摩義士に思いを馳せながら ～鶴丸城周辺散策～	117	4.8
“東洋のネルソン” 東郷平八郎と桜島&錦 江湾の絶景を眺めながら	94	3.9
島津700年の歴史を訪ねて！ 藩主が眠る菩提寺跡&ゆかりの地散策	180	7.4
幻の宰相“小松帯刀”と 島津77万石の城址を偲ぶ	223	9.2
“薩摩が生んだファーストレディ” 篤姫ゆかりの地を歩く	1,125	46.5
維新の原動力！西郷・大久保を育んだ偉人 輩出の地・加治屋町をめぐる	117	4.8
近代日本はここから生まれた！ 島津斉彬の近代化遺産を歩く	105	4.3
桜島のビッグスケールを体感！ 美しい錦江湾を眺めながら	71	2.9
鹿児島の魅力再発見！ 天文館周辺の建築遺産見て歩き	56	2.3
向田邦子の「鹿児島感傷旅行」 “故郷もどき” 鹿児島のまちなか散策	22	0.9
ぶらり天文館なるほど物語	47	1.9

(財)鹿児島観光コンベンション協会の提供資料をもとに筆者が作成。

また、2008年5月、中村氏が県内初の自転車による観光案内「かごりん」の運行を開始し、これが県内外のマスコミに取り上げられ、篤姫ゆかりの地として上町への注目が集まる先鞭となった。さらに、『篤姫』の放送が始まると、徐々に上町地区を訪れる観光客も増えてきた。春山氏と山下氏は「放送が始まるまで今和泉島津家本邸跡の場所さえ知らなかった」ものの、「地元のひとつが地元を知ること」と「上町にある篤姫ゆかりの地を紹介したい」という二つの思いが強まり、観光ボランティアガイドをおこなうことを思い立った。

「上町維新」の観光ボランティアガイドは、対応可能な人員の面を考慮し、要請があったときにおこなう不定期なものとして展開されている。これまでの活動のなかで、とくに両氏の印象に残っているのは、2008年10月25日の「ねりんピックウォーキング」、11月15、16日の「維新のふるさと鹿児島ウォークー篤姫ウォーク」である。春山氏は、「石の文化の説明やちょっとしたエピソードを交えて、篤姫やそれ以外の上町の歴史の流れを説明する」ように心がけた。石の文化とは、入戸火砕流堆積物（シラス）に由来する溶結凝灰岩が屋敷跡の石塀に使われていること（写真3）、福昌寺跡にある斉彬の墓石は、黄色みを帯びた山川火砕流由来の山川石である（写真4）点を指している。山下氏は、「篤姫はもちろん、島津氏や上町の歴史に加え、いまの街の面白いところも紹介」した。このことは、「自分たちのまちを、篤姫を契機に知ってほしい」という、みずからの思いを再認識する機会になった。

彼らは、「ステーション」のガイドとは異なり、定期的な講習を受けたわけではない。しかし、特徴的なのは、上町に住んでいるからこそ、地域への愛着も人一倍強い点にあらう。そして、「上町維新」の活動は、観光ボランティアガイドにとどまらず、「この町をもっとよくしたい、もっと知ってもらいたい。



写真3 今和泉島津家本邸跡でのガイドのようす



写真4 山川石でつくられている島津斉彬の墓

そんな思いから集まったメンバーみんなのいろんなアイデアを形にする⁷⁾方向へと発展していく。現在では、大きく3つの柱を掲げて地域活動を展開している。

- ・きずなづくりプロジェクト…ひととひとのきずなをプロデュースする（てづくり美術館、クリスマスふれあいバザール、お雛祭りふれあいサロンなど「井戸端サロン」の定期開催）。
- ・いにしえプロジェクト…上町の歴史や文化を紹介する（観光ボランティアガイドの実施、地域ミニコミ誌「上町浪漫」の刊行）。
- ・ものづくりプロジェクト…上町ゆかりの商品や、ものを作る。

また、実際にガイドを務めたことで、観光ボランティアの役割の大きさに気づかされたという。具体的には、観光ボランティアガイドが活動できるのは、そのルートに位置する地域の人びとの協力や理解が欠

7 2009年6月6日の聞き取り調査であがった複数の発話をもとに、筆者が集約したものである。

かせないという点である。「上町維新」は、地域住民に対して、「まち歩き」ルートが生活圏内に設定されていること、そのことで観光客の流入が増えることの周知もおこなった。まさしく、「観光ボランティアガイド」の活動を表裏から支えたのである。

「上町維新」は、「ステーション」とは異なり、不定期なニーズに対応してきたものの、前述のとおりそれは観光客のニーズに柔軟に応えるためではなく、人員的な制約の側面が大きかった。よって、経済的な波及効果を問われればより小規模で限定的である。しかし、特筆すべきは、ここに地域コミュニティ再生への住民主体の動きがみられる点である。すなわち、観光ボランティアガイドとは、地域住民が自らの暮らすまちを見つめなおすエンパワーメントとしての役割も有しているといえよう。

IV. 考察—観光ボランティアガイドの意義

『篤姫』放送は、スモール・ツーリズムという言葉に代表されるようにそれぞれの地域にある歴史や文化、自然などを活かした観光が注目を高めた時期と重なる。茶谷幸治氏も述べるように、「駆け足ではなく、訪れる人びとの歩く速度や視点で」、とりわけ「知的好奇心と行動力の豊かな「団塊の世代」が定年を迎える中、歴史文化を中心とする知的資源」を活用することこそが、観光ボランティアガイドのもっとも大きな存在意義なのである（茶谷、2008）。

この点は、「ステーション」「上町維新」ともにその役割を担ったといえる。一方で、比較的自治体の関与度が高くトップダウン的に始まった「ステーション」と、地域住民から仕掛けを生み出したボトムアップ的な「上町維新」という成立背景のちがいは対照的である。すなわち、前者は全市民や全市街地という広域な取り組みが登場した点、後者は複数の町内会単位といった比較的せまい地域で観光ボランティア+αの活動へも好影響を与えたということは、それぞれの特徴として位置づけられる。

ところで筆者は、地域住民の主体的な活動は、トップダウンとボトムアップのいずれもきっかけづくりとしては有効であると考えている。いずれも、住民がみずから暮らす地域の資源に「気づく」効果をもたらす点において大差はないからである⁸。たとえば、観光ボランティアガイドの担い手として活躍したい地域住民は、多くが同様の活動に関心はあったとしても、それぞれが事前に有する専門的な知識や技能は一様ではない。活動に身を投じていく過程で、地域住民の目線から内容の修正や補足を要する点を見つけ適宜改善を図っていくのが一般的な姿といえる。その時点に達して、はじめて住民に期待される真の「主体性」が生まれるのである。この点からみれば、「ステーション」「上町維新」のいずれも、コーディネータ的な役割を果たす住民やNPO法人、自治体などのかかわりの存在は認められるものの、いまのところ観光ボランティアガイドが前面にたって運用にあたる段階にまでは至っていない。スモール・ツーリズムは、マス・ツーリズムにくらべて、短期間で多大な経済効果をもたらすものではない。また、主流となりつつある観光形態の個別化は、今後さらにスモール・ツーリズムへの素早い対応を地域に求めるようになると考えられる。それゆえ、持続可能性に活路を見出そうとする（あるいは、見出さなければならぬ）観光のあり方を探るとき、観光ボランティアガイドの存在は正鵠を射たものといえるし、「上町維新」のような地域コミュニティ再生へと活動が派生していくケースも観光ボランティアガイドの副次的な産物ではなく、観光教育の分野における新たなニーズの発見ととらえるべきであろう。

つぎに課題に言及するとすれば、今回の観光ボランティアガイドに対する気運の高まりは、大河ドラマにあったという特性を十分に考慮する必要があったのではないかという点である。

大河ドラマは、毎年舞台となる都道府県など自治体が精力を上げて観光客の増加を期待してその誘致に

8 「気づき」の視点とは、地域資源の再発見を目的としたワークショップ等でみられる、住民たちの能動的に地域資源を活かしていこうという意識の伸長の「過程」をいう。詳細については、深見（2006）を参照されたい。

動く。数十年に一度あるか否かのビッグチャンス到来という意識は、自治体や観光関係の団体にも少なからず影響を与えるといえよう。また、大手旅行会社のパックツアーが多く登場し、大都市圏をおもな出発地とする観光客が増加する。すなわち、マス・ツーリズム的なニーズが強まっていくことになる。一方、「まち歩き」は、スモール・ツーリズム的なニーズに対応した形態である⁹。そこで、異なる形態のニーズをコーディネートする存在として、観光ボランティアガイドがルート選定の段階から参画するなどの仕組みを構築することが求められる。ところが今回は、彼らは『篤姫』ブームを支える人材としての高い可能性を持ちながら、そこまでの関与を果たせる機会がほとんどなかった。

ここで誤解してほしくないのは、筆者は、観光ボランティアガイドとなる人びとに、いきなりルートの選定からガイドまでおこなわせるべきと言っているのではない。それぞれの過程において、自治体やNPO法人、専門家たちとの対等なパートナーシップを築いていく手間を決して惜しまず、トップダウンやボトムアップで表出する修正や補足を求める地域団体内外の要望にどう応えていくかに時間や労力を割くことが肝要と考えている。

また、観光ボランティアガイドがもたらす直接的な経済効果は、小規模であると述べた。もちろん、スモール・ツーリズムという名称からも明らかなように、ガイドのみの収支計算だけではマス・ツーリズムのそれには到底及ばない。しかし、そこで観光ボランティアガイドの事業を中絶や縮小に向かわせるのは拙速に過ぎるというべきであろう。たとえば、「長崎さるく博'06」の成功は、3年間という準備期間があり、もともと同類の活動をしていた地域団体や新たに観光ボランティアに参加したい地域住民をコーディネートし、彼らがガイドを経験する過程をとおして、「わがまち意識」が醸成されていったことにある（茶谷、2008）。そのような住民の増加は、まち全体へさまざまな波及をもたらし。口コミという広告宣伝に始まり、ガイド途中での食事や買い物といった消費行動、そして他のルートにも参加してみたいというリピーターの創出を促すという循環である。

これを実現するのは、もちろん簡単なことではない。しかし、本稿で取り上げた観光ボランティアガイドは、『篤姫』ブームを活かしきるまでには実は至らなかったのではないだろうか。彼らは、パースペクティブな存在として活躍できる余地のあることを、ガイド自身もさることながら、パートナーシップを組む自治体等の相手方も十分に認識を深めておく必要がある¹⁰。

V. おわりに

本稿では、『篤姫』ブームを契機とした観光ボランティアガイドに焦点をあて、その台頭と存在意義について動態的な事例を取り上げ論じてきた。その結果、『篤姫』の舞台となった鹿児島において、彼らの

9 「長崎さるく」の場合、事前のルート選定や市民ガイドの育成に多くの時間を割いており、結果として観光客の口コミもさることながら、入念な広報がすすめられていた点も見逃せない。ここに、スモール・ツーリズムのニーズの広がり大きな特徴を見出せる。茶谷（2008）は、「長崎さるく博'06」を例に以下のように述べている。「[市民主体]の「まち歩き」は、「準備期間→実施期間」という会場型イベントの方法では成功しないと考えた。「プロが準備をしてヨーイ、ドンで市民が楽しむ」という方式は、大量規格生産の「製造→消費」の構造と同じで、製造のプロが消費者に商品を提供すればそれで事足りるのであるが、「まち歩き」は市民が製造し市民が消費するという構造を持っている。…（中略）…長崎の場合、「まち歩き」という商品を市民が育てなければならぬ。これを三年がかりでやろうという計画である。」

スモール・ツーリズムとマス・ツーリズムの関係の詳細については、深見（2009）において論じた。

10 この点については、加藤ほか（2003）において、「活動の意義や重点を置くメリットの方向性は人様々であるが、そのような多岐に渡る考え方を持つ人々が、ガイド活動をするという大きな目的の下に集まり、共存しながら活動」しており、「活動者・来訪者・地域など多方向へのメリットを内包し、広い枠組みの中で様々な形態をとること」ができる存在ととらえられている。この特徴は、本稿で取り上げた観光ボランティアガイドを担った人びとにも共通してみられることから、この点をふまえると、『篤姫』ブームの波及効果も本来は受容と発信の両側面から拡大することが可能であったと考えられる。それゆえ、トップダウンやボトムアップで表出する課題を彼ら自身の手で解決を図るといったパートナーシップも十分に担いうるであろう。

存在が社会的に認知されつつある実態を知ることができた。今後、前章で述べたような課題を整理し、スモール・ツーリズムや持続可能性といった特徴をいかに伸ばしていくことができるかは、地域住民の主体性にたった質的量的な観光ボランティアガイドの充実に懸かっているのである。

最後に、あえて警鐘を鳴らすとすれば、大河ドラマ放送という全国が注目するできごとをきっかけに始まった観光ボランティアガイドは、放送終了以降も持続して「まち歩き」商品を展開できるかの正念場に立っている。それゆえ、もっとも注目を集めていた2008年度の「ステーション」主催事業への参加者総数が2千人台であることは、やはり看過できない現実として重く受け止めなければならない。また、「わがまち意識」が生まれる萌芽の事例として、「上町維新」の活動は一定の評価がなされよう。地域団体としてさまざまな活動を上町地区の団体と連携しながら取り組んでいるが、さらに、たとえばガイド部門が「ステーション」と協働体制を築くといったコーディネートが実現することで、観光ボランティアガイドの存在意義を高める余地が残されている。

また、『篤姫』ブームは、本稿で対象とした鹿児島市市街地以外にも、観光ボランティアガイドの誕生



番号	名称	所在地	おもな内容
①	篤姫観光ガイド	指宿市今和泉	篤姫ゆかりの地。
②	いっど・いっが・山川港の会	指宿市山川町	天然の良港・山川港と幕末商人の歴史。
③	坊津やまびこ会	南さつま市坊津町	密貿易の歴史と路地散策。
④	日置市観光ボランティアガイド	日置市日吉町	園林寺跡（小松家菩提寺）と小松帯刀。
⑤	薩摩川内市観光ボランティアガイド	薩摩川内市平佐	北郷氏の領地・平佐郷の歴史。
⑥	観光いずみボランティアガイドの会	出水市麓町	『篤姫』ロケ地となった武家屋敷群。
⑦	始良カリスマボランティア観光ガイド	始良町重富	島津久光ゆかりの重富地区の歴史。
⑧	霧島しっちょいどん	霧島市霧島温泉ほか	龍馬・帯刀・西郷ゆかりの温泉。
⑨	垂水島津館ガイド	垂水市本町	垂水島津家の歴史。

図4 鹿児島県内の観光ボランティアガイド

パンフレット『島津斉彬生誕二百年』（観光かごしま大キャンペーン推進協議会発行）をもとに筆者が作成。

という影響をもたらした(図4)。いまもその動きは拡大しており、ますますその存在意義は高まっていくであろう。このような地域団体が、既存の類似活動をおこなっている人びととどのように連携を図り、観光客のニーズに応じていくのか、地域に根づいていく過程に今後も注目していきたい。

謝辞 本稿をまとめるにあたり、鹿児島まち歩き観光ステーション所長の濱田康雄氏、上町維新まちづくりプロジェクト事業部長の春山亮氏をはじめとする皆様には、快く調査にご協力いただいた。この場を借りて、厚くお礼申し上げる。

本内容の一部は、2009年3月に開催された第13回進化経済学会(於：岡山大学)において発表した。

参考文献

1. 江村有香・禪院昭・秋山克史・渡邊貴史(2009),「長崎県小浜温泉地域における地域資源の活用に関わる取り組みの現状」,『長崎大学環境科学部環境教育研究マネジメントセンター年報・地域環境研究』創刊号, pp.37-45.
2. 加藤麻理子・下村彰男・小野良平・熊谷洋一(2003),「地域住民による観光ボランティアガイド活動の実態と動向に関する研究」,『ランドスケープ研究』66(5), pp.799-802.
3. 住木俊之(2007),「観光ボランティアガイド組織におけるサービスの品質管理に関する一考察」,『第22回日本観光研究学会全国大会学術論文集』, pp.205-208.
4. 茶谷幸治(2008),『まち歩きが観光を変える—長崎さるく博プロデューサー・ノート—』, 学芸出版社.
5. 原口泉(2008),『維新の系譜』, グラフ社.
6. 深見聡(2006),「地域コミュニティの再生と「気づき」の視点—キーワードの整理とアプローチ手法に関する考察—」,『地域政策科学研究』3, pp.67-90.
7. 深見聡(2009),「大河ドラマ『篤姫』効果と観光形態に関する一考察」,『長崎大学環境科学部環境教育研究マネジメントセンター年報・地域環境研究』創刊号, pp.57-64.
8. 森川与志夫(2008),「観光ボランティアガイド活動体験における学び—高校生の実践コミュニティへの参加の分析を通して—」,『国立青少年教育振興機構研究紀要』8, pp.187-194.
9. 矢島正枝(2008),「町あるき観光に於ける観光ボランティアの役割についての考察」,『第23回日本観光研究学会全国大会学術論文集』, pp.449-452.